

静岡大学教育学部附属特別支援学校研究フォーラム第4分科会の概要

日時

平成23年11月18日(土)9:00～11:30

企画者

山元薫氏（静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 教職大学院）

徳永亜希雄（国立特別支援教育総合研究所）

司会者

山元薫氏

徳永亜希雄

話題提供者

基調報告

徳永亜希雄

「特別支援教育における ICF 及び ICF-CY の活用動向」

実践報告

①小林幸子氏（静岡県立富士特別支援学校 教諭）

「ICF 及び ICF-CY 活用の方向性の検討及びケース会議での活用の取組」

②鈴木道子氏（静岡県立浜松視覚特別支援学校 幼小学部主事）

「視覚障害のある子どもへの ICF 活用の取組」

③川口ときわ氏（静岡県立中央特別支援学校 主任寄宿舎指導員）

「寄宿舎における ICF 及び ICF-CY 活用の取組」

④伊藤昌明氏（静岡県立西部特別支援学校 教諭）

「巡回相談における ICF を活用した事例検討の取組」

⑤石川誠氏（静岡市立宮竹小学校 教諭）

「発達障害のある子どもの指導と支援への ICF 活用の取組」

⑥山元薫氏

「ICF 活用を支える研修の取組」

タイムテーブル

9:00～	9:05	企画趣旨説明
9:05～	9:35	基調報告
9:35～	10:05	話題提供①～③
10:05～	10:15	休憩
10:15～	10:45	話題提供④～⑥
10:45～	11:20	ディスカッション
11:20～	11:30	まとめ



ディスカッションの概要

1. 趣旨説明

徳永(以下、司会)：

本分科会では、特別支援教育における ICF の活用をテーマとしているが、基調報告で述べたとおり、各学校等で多種多様な背景のもとで ICF が活用されていることを踏まえ、正しい ICF の活用の仕方について結論づけることはしない。あえて言うならば活用しないという選択肢もあって良いと考えているが、これまで活用の蓄積とこれからの拡がりの可能性という点から、自由な質疑応答をベースに意見交換や情報共有を図りたい。

2. 話題提供者からの捕捉

伊藤氏：

今回紹介した事例検討の手法は、浜松市内の有志の先生方の勉強会での手法を参考にさせていたれているものである。これまでの事例検討会では、活発な意見交換が行われないこともあったが、今回の手法は活発な意見交換が行われることが多いことから、取り入れている。

川口氏：

生徒本人が関連図作成後には毎回感想を書いてもらっており、今回の事例では、今後も取り組んできたいとの感想が聞かれている。

3. 質疑応答

フロア：

ICF 関連図で課題を導くまでのプロセスを教えてください

伊藤氏：

関連図に情報を書き込む前に、事例をエピソードについて聞き取りをしながら鍵となると思われるところにあたりをつけ、その上で関連図作成作業を通して整理し、指導や支援の方向性を探るようにしている。

山元氏：

通級による指導で一緒に関わっている取り組みでの分析の仕方について説明をしたい。これまでかかわった事例の中に、担任が変わり、学級経営の仕方が変わったことで困難さが軽減された事例がある。そこで、軽減される要因は何なのか、他に軽減されない困難さの背景には何があるのかを検討して学級担任に伝えるようにした。

このようにエピソードから、生活機能や背景因子の視点から困難さの原因を探り、指導や支援の方向性を探るようにしている。

司会：

分析の方法は目的によって異なると考えられる。特別支援教育での自立活動の指導課題等もその妥当性やそれを導き出したプロセスの説明等が求められる。ICF 関連図作成による検討プロセスは、課題を導く作業への取り組みやすさへの寄与とプロセスの説明への寄与が期待される。

一方で、検討の結果に作成された関連図については、その作業に関わっていない人には、そのプロセスの理解が難しい面もある。

フロア：

石川氏に尋ねたい。

- 1) 子どもと教師の相性の話があったが、合う・合わないということを決定づける要因は何か。
- 2) 2度の関連図作りをされたと聞いたが、よりよい関連図にしていくポイントは何か。

石川氏：

- 1) 教師が大きな環境因子だということを強調したい。引き継ぎ資料は重要だが読まれない場合もある。抽象化すると当たり前のことになるので、具体的ななかかわり方のポイントを伝えるようにしている。
- 2) 最初に作った ICF 関連図を見ながら話し合うことで、情報が追加されていく。関連図を見ながら課題を取り巻く情報との関連を考えて検討し、もとのものに足していくのが良いのではないかな。

フロア：

巡回相談を通して、授業を見学し、担任と話をする等の取り組みをしているが、その中で得た情報を整理するのに ICF 関連図を用いている。事例検討会で用いるところまでは至っていないが、その準備のためには役に立っている。今後さらに活用してみたい。

司会：

検査結果等に関する情報等を整理するための参考資料を平成 22 年度国立特別支援教育総合研究所研究研修員溝端氏が作成した。紹介してほしい。

溝端氏（フロアより）：

最初から ICF 関連図を作るのは、必ずしも簡単ではない。これまで見てきた情報をどう整理していくのかということを行うための手立てとして作った。

フロア：

ICF 活用の取組の様子が変わってきたような印象を受けた。まさしく 2011 年度版ではないか。質問は次の 2 点。

- 1) ICF 関連図には、多くの情報から中心課題を導く、いわゆる「全体図」とある事象に絞って検討していく、いわゆる「部分図」があるように思う。自分は後者が合うように感じているが、小林氏、鈴木氏はどちらなのか、それとも両方か。両方用いる場合はどちらから入るのがよいのか。
- 2) 川口氏、伊藤氏は、ICF 活用に当たって、指導者や進行役以外の参加者の必要な準備状況をどうとらえるか。

小林氏：

私たちの取り組みとしては、「全体図」に取り組んだ。私個人としては、ある特定の部分だけにとらわれないよう、全体図から入る方向性を志向している。

鈴木氏：

取り組みとしては、総合的な学習に絞るところから始めたが、「全体図」から「部分図」への流れを検討するほうがよいのではないかと感じた。そのようにしてみたが実際にも良さそうだった。

「部分図」については今のところ取り組んでいない。

山元氏：

勤務校では、生活地図を用いて大まかな課題を掴み、「部分図」で、焦点を当てた参加について大まかな検討をしたり、授業について検討したりしている。

司会：

小林氏の勤務校で全体図が使いやすかったのは、個別の指導計画の振り返りをする夏季休業中に使ったためと考えられる。年度末や年度初めと時間的制約から難しいかもしれない。それぞれの学校の年間計画に合わせて検討したほうがよい。

川口氏：

以前、自分自身が ICF 及びその活用に関する知識技能が十分でなかった頃に子どもと一緒に取り組んだ時に混乱した経験がある。その後、自分の熟練と共に、関連図作りがスムーズになってきた。指導者側が ICF やその活用について知っておかないと、環境因子に目が向かない等の、ICF の考え方が生きない関連図になる可能性がある。

伊藤氏：

相談の前に依頼主から準備について尋ねられることがあるが、あまり多くの準備は求めず、ケース会の場でホワイトボードを用いて一緒に情報を整理し、考えていくようにしている。

司会：

ICF 活用に関する知識・技能の関する準備としては、校内等によって活用のコーディネーションをとる立場の人とその人のもとで活用をする担任等では、求められる力が異なると考えられる。

司会及び企画者：

本フォーラムへの参加及び活発な議論に感謝申し上げます。